つなぎ合わせたメダル

昭和十一年（一九三六年）ドイツで行われるオリンピックをまぢかにして人々の関心は、ぼう高とびの西田、大江の二人に集まっていた。大江は、西田のもっていた記録をやぶって四・三四メートルの日本新記録を出し、いきおいにのっていた。西田は、大江に記録をやぶられたとはいえ、前のオリンピックで銀メダルを取り、その実力はだれからもみとめられていた。二人は、ずっと前から競技会のたびに競い合ってきたのである。

二人は、よい競争相手でありながら、兄弟のように仲がよかった。大江が日本新記録を出したときでも、西田は自分のことのようによろこんだ。また、大江も、オリンピックに出場できるかどうかを心配している西田を、真けんにはげました。

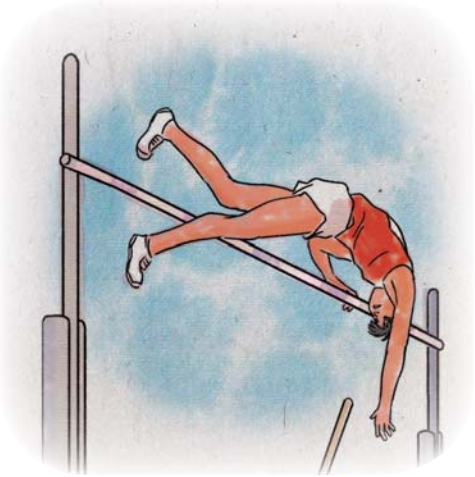
そして、二人は、ともにオリンピックに出場することができたのである。

ここベルリンのオリンピック競技場では、夜になってもぼう高とびの競技が続いていた。十万人の大声えんと、かがやく照明の光の中で四人の選手が、全力をつくしてたたかっていた。西田、大江、それにアメリカのメドウスとセフトンである。

とうとうバーの高さは、四・三五メートルに上げられた。成功したのはメドウス一人。これで一位は決まった。残る三人で二位決定戦である。すでに夜の九時をすぎている。つかれと冷えこみのため、なかなかバーをこえることができなかった。

だんだんとバーが下げられ、ついに四・一五メートルになった。一回目、二回目ともに全員失敗。いよいよ三回目。先にとんだセフトンは、わずかにむねがふれバーを落とした。西田と大江は、思わず目が合いうなずきあった。

大江の番である。バーをじっと見つめてスタートし、力強い助走から思いきってふみこんだ。西田は心の中で何かをさけんでいた。むねがバーをかすめ、かすかにゆれた。落ちない。



成功だ。

次は西田である。ほっとした気持ちを引きしめ、西田はスタートの場所に立った。大江は、いのるような気持ちで西田の動きを見守っていた。西田は、スピードも十分に助走すると、ぼうをしなわせ軽々ととびこえた。競技場全体から大きなはく手とほめたたえる声がわき上がった。

いよいよ、西田と大江の二位決定戦である。しかし、二人だけになってみると、相手に勝ちたいという気持ちが、二人とも急にうすれてきた。年上の西田は、いたわるように大江に声をかけた。

「大江君、これ以上きみと競って勝負を決めたくないんだ。きみはどう思う。」

「ぼくも同じ気持ちなんです。西田さんといっしょだったおかげで、ここまでがんばれたのです。くいはありません。」

大江は、西田の言葉を待っていたようにさん成した。このことをしんぱんに伝えると、二位決定戦をやめることがあっさりみとめられた。

二人は、ともに二位だと思っていた。ところが、正式の発表では、二位西田、三位大江となっていた。それまでにとんだ回数を調べて決められたのである。西田は、おかしいと思った。

（これでは、大江君が気のどくだ。大江君も同じ高さをとんだのに。）

しかし、大江は、西田の思いとはべつに、観客の声にこたえて手をふっていた。

次の日、ぼう高とびの表しょう式が行われた。西田は、そっと大江を二位の台の方へおしてやった。大江は、自然に二位の台に上がり、西田は三位の方に上がった。二人がもらったのは、やはり、銀メダルと銅メダルだった。（本当は、銀メダル二つなんだけどな。）西田は心からそう思った。

その後、日本に帰ってから、二人は話し合って、二つのメダルを半分に切り、銀と銅をつなぎ合わせることにした。こうして、西田と大江の友情のメダルは作られたのである。

（鈴木　康裕）

（写真提供）
・秩父宮記念スポーツ博物館

〈文部省　道徳教育推進指導資料（指導の手引）2〉